

環境の意味と日常について

—土木デザイン原論のための断片的考察—

中井 祐¹

¹正会員 博士(工学) 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

インフラのデザインを通じて人間の日常をゆたかにする。この意味での土木デザインの原論を立てるためには、インフラがわれわれ人間の日常にかかわる仕方を理解するとともに、日常のゆたかさとはなにかをかんがえねばならない。本稿はそのための基礎的な考察をおこなう。まずユクスキュルの環世界の概念を引用して、人間をはじめとする主体が、行為を介して環境の意味を見いだしながらそれぞれ環世界を構築して生きていること、また、環世界同士が相互につながり合って関係の世界を形成して「日常」という公共的な場を提供していることを述べる。さらに、人間という主体のきわだつ特徴として、包括的かつ大規模に環境を改変して環境の意味をコントロールしようとする主体である点、および、主体としての生が「わたしとして」生きるという性格を帯び、かつその「わたし」が私的／公共的の二重性をもつ点をあげる。最後に日常のゆたかさについて、今後の考察の方向とともに言及する。

キーワード:土木デザイン, インフラストラクチャー, 環境の意味, 日常

1. はじめに～本稿の目的と構成～

人間の日常をゆたかにする。それが現代におけるデザインの主たる意義である¹⁾。この立場に立てば、土木デザインの役割は第一に、土木インフラストラクチャー(以降「インフラ」)の新設や改修や維持を、人間のゆたかな日常につなげることにある。この意味での土木デザインの原論(方法論およびその根拠となる哲学)を立てようとするならば、インフラがわれわれ人間の日常にかかわる仕方を理解するとともに、日常のゆたかさとはなにかをかんがえる²⁾必要がある。

本稿では、「インフラ(土木)は大地の形質を改変することによって環境の意味を再定義する³⁾」という前提に立ち、まず環境の意味について、ユクスキュルの環世界論のレビューをおこなったうえで、「日常」とはなにか、人間にとってそのゆたかさとはなにかをかんがえたい。

2. 環境の意味

(1) 環境という概念

環境 environment の environ- は、「周囲」を意味するフランス語の古語 viron に en- がついて動詞化したもので、「囲い込む」「取り巻く」といった意味である。したがって、原義に忠実な定義は「生物や人間を取り巻く外圍のうち、主体とある関係をもって、直接、間接の影響を

与える諸要素、諸条件の全体⁴⁾」となる。

重要なのは、環境にはかならず、外圍となんらかの関係をもつ「主体」が存在する、ということである。主体が存在しないかぎり環境は具現しない。環境という語の定義や用法は時代によって変化してきたが⁵⁾、本稿は「(取り巻いている)環境」にはかならず「(取り巻かれている)主体」がいるという両者一体不可分の関係にこそ、環境概念の核心がある、という立場を考察の起点としたい。

(2) 主体と環境～環世界Umweltという概念～

ドイツの生物学者ユクスキュル(1864～1944)は、主体と環境の一体不可分の関係を「環世界 Umwelt」という概念で論じた⁶⁾。ユクスキュルによれば、生物はそれぞれ主体として、身のまわりの環境中の対象物＝客体と関係を結びながら構築した、主観的環境を生きている。

「世界は一つしかなく、そこにあらゆる生物が詰めこまれている⁷⁾」のではない。生物はみな、それぞれにとっての意味に満ち、それぞれの空間と時間が息づいている独自の環境＝環世界を、それぞれ生きている。

(3) 主体の行為と環境の意味

ユクスキュルは、環世界では「感覚器官から生じた知覚像が、その結果あらわれる行動に応じた「作用像」によって補われ変化する⁸⁾」という。

たとえばわれわれが、二本の縦棒のあいだに等間隔で

設置された複数の横棒、という一定の構造を備えた物体を、形やプロポーションや材質がさまざまであっても一様にはしごとして知覚できるのは、それを登るという行為についての作用像をわれわれがもっていて、その作用像がその物体の知覚像に不可避的に結びついて意味を与えるからである。それを登ることができない主体の環世界に、当該物体ははしごととしては存在しない。

つまり、主体は行為(もしくは行為の可能性)を介して環境の意味を知る。ユクスキュルは「ある動物が実行できる行為が多いほど、その動物は環世界で多数の対象物を識別することができるというてよい⁹⁾」と述べる。生物はさまざまな行為をくりかえしながら、身のまわりの環境の意味を知り、身につける。行為を介して、環境の諸物がいわば身体化されて、主体と密接に関係づけられてゆく。そうして主体にとっての意味で満たされた環世界が形成されてゆく。それが主体として生きるということであり、すなわち主体が「世界を知る」ことである。

(4) 主体は環境の意味をコントロールする

主体と環境の関係をアフォーダンス Affordance の理論で表現したギブソンは、ニッチという概念をとりあげてつぎのように述べる。「ニッチは、動物がどこ(where)に住んでいるかより、いかに(how)住むかにより多く関連している。私はニッチとはアフォーダンスのセットであることを指摘する(中略)ニッチは、動物にとって適切な、比喩的にいえばその動物がフィットする環境の特徴の一セットである¹⁰⁾」。生物界におけるニッチの存在は、動物は環境の意味を(程度の差はあれ)コントロールする主体でもある、という事実を示している。

とりわけ人間は、おそらくどんな生物よりも、生きられる環境を得るために包括的かつ大規模に環境を改変し、環境の意味をコントロールしようとする主体である。ギブソンはいう。「人類はなぜその環境の形や物質を変えてきたのだろうか。それは、環境が人間にアフォードするものを変えるためにである¹¹⁾」。インフラや土木技術はそのための主要な道具である。

3. 「日常」と人間という主体

(1) 環世界と日常

環世界は、それぞれの主体が身のまわりの対象の意味を知り、身につけ、その意味をコントロールしながら生きている、主観的な世界である。それは、生きた主体としての空間・時間の日常的経験の基盤となるが、しかし日常そのものではない。

日常とは、主体にとって反復的におこなわれるなじみ

の深い一群の行為と、その行為を成り立たしめる場とを包括した表現だろう。そして、すくなくとも同種の(知覚器と身体を備えた)主体は、その日常の生に同種の様式をもっている。すなわち日常の行為は、その行為に対応する特定の場をもっており、そこに定型的な時間=空間構造や、安定的な主体=他者の関係を見てとることができる。そしてこの構造や関係性は、一定の集団を構成する主体間で共有されるという意味で、公共的である。

環世界は各私的な世界である。主体Aが主体Bの環世界を直接のぞいたり、ましてや生きることは不可能である。しかし環世界は相互独立ではない。主体Aは環世界Bにおいては客体であり、主体Bは環世界Aの客体となる。あるいは同一の客体がそれぞれの環世界のなかでことなる姿や意味をもって存在する。そのようにして、環世界と環世界はつながり合い、かかわり合っていて、単独では成立していない。環世界Aでおきているできごとと、環世界Bでおきているできごとは、なんらかの仕方で作作用し合っている。すべての環世界はそれぞれが各私的な世界であると同時に、「環世界同士のかかわり合いの全体」という公共的な世界の構成因でもある。

環世界同士がかかわり合う、関係の世界。ことなる主体で共有し合う公共的な世界。ここでは、日常世界という概念をそうとらえておきたい¹²⁾。

(2) 人間という主体の特徴

人間という主体(に固有)の特徴はなにか。まずは「わたし」という意識であろう。人間の生において、主体として生きることは、「ほかのだれでもないわたしとして」生きることと同義である。個体としての生が、唯一性、一回性、代替不可能性を帯びる。

木村敏によれば、「わたし」には二つの側面がある。まず、すべての人が例外なく各自的に私でありうる、という意味での「公共的な「私」」。もうひとつは、いままさにここに生きている、というなまなましい実感の根拠であるところの、絶対的に交換不可能で一回かぎりの「私的な「私」」。

木村はつぎのように述べる¹³⁾。

私は公共的な「私」でありうる可能性を免れた仕方、私的な「私」であることができない。リアリティの裏付けなしに、アクチュアリティが成立することはありえない。しかしその一方で、私的な「私」のアクチュアリティを離れた公共的な「私」のリアリティというようなものは、抽象的観念以外のなにものでもないだろう。私的な「私」と公共的な「私」、アクチュアルな「私」とリアルな「私」の関係、それは二つの契機の双方が互いに基礎づけあって一つの現実を構成して

いるという意味で、「相補的」な関係ということが出来る。

精神科医でもある木村は、統合失調などの精神疾患を、自己の自明性がなんらかの意味で損傷を受けた病態として分析し考察する。とくに、私的な(アクチュアルな)わたしと公共的な(リアルな)わたしの相補性という着眼は、木村の自己論の核心のひとつである。いうならば、われわれ人間は「二重の自己」を生きる主体であり、この二重性がバランスを崩すと、自己は自明性をうしなつて危機におちいる。

4. 「日常のゆたかさ」の考察に向けて

以上の考察の要点を簡潔にまとめておく。

人間をはじめ、世界を生きる主体は、行為もしくは行為の可能性を介して環境の意味を知り、主観的な環世界を構築して生きている。同時に、環世界同士は相互につながり合つて関係の世界を形成し、「日常」という公共的な場(プラットフォーム)を提供している。

さらに、さまざまな主体のなかで、人間という主体が有するきわだつ特徴は二点。第一に、どんな生物よりも、包括的かつ大規模に環境を改変して環境の意味をコントロールしようとする主体であること。第二に、主体としての生が「わたしとして」生きるという性格を帯び、かつその「わたし」が私的/公共的の二重性をもつこと。この、人間主体にきわだつ特徴ふたつが相互にどのような関係にあるのか、という問いは、今後の考察において重要な着眼点のひとつになるだろう。

ところで日常のゆたかさとはなにか。ゆたかな日常を成立させるなんらかの客観的条件があつて、それを主体が認識もしくは獲得したときにゆたかな日常が発現する、という図式でとらえられるだろうか。それとも、日常がゆたかかどうかは完全に各私的な主観の範疇であつて、そもそも論理で普遍化できる価値ではないのだろうか。

今後の考察の帰趨はわからないが、すくなくとも本論は、日常のゆたかさを認識の問題としては扱わない。人間主体の「ありかた」に帰する問題として、人間が「人間らしくある」とはどういうことか、存在論的にかんがえようとしている。さらに、その人間のありかたを下部で構造的に規定する *infra-structure* のありかたをかんがえ、さらにそのインフラのありかたを実現するデザインの方法論をかんがえようとしている。

なお、このときインフラはふたつのありかたで存在しうる。まず、個々の環世界に登場し、当該主体にとっての環境の意味を規定する客体として。つぎに、ことなる

環世界間で共有されることによって環世界同士をつなぎ合わせ、関係づけて、日常という公共的なわたしの居場所となるプラットフォームを形成する装置として。

人間という主体は、私公二重の自己を生きている。わたしの環世界のみゆたかになつても人間らしさは満たされないし、逆に、日常の公共性に身をゆだねるばかりでは、主体として世界を知りつつ生きる実感はえられない。デザインの役割のひとつは、この二重性の調整にあるのではないか。今後さらに考察を深めていきたい。

補注/参考文献

- 1) 公益財団法人日本デザイン振興会のHPに「デザインとは？」という頁 (<https://www.jidp.or.jp/ja/about/firsttime/whatsdesign>) がある。本稿における「デザイン」の意義や概念は、ここに示された日本デザイン振興会の考えかたに倣う。なお当該頁では、デザインの役割を「デザインは常に「ヒト」が中心にあり、だからこそ社会を進展させる力を持っています。誰かの生活を真に豊かにすること、またはその可能性があること。それを達成しているものごとを我々は「よいデザイン」と考えます」と述べている。「日常をゆたかにする」は、上記を筆者なりに解釈し一般化した表現である。
- 2) 第二の論点、すなわち日常のゆたかさとはなにかという問いは、本来、各私的な省察によって追究されるべき性格のものかもしれない。ただ、日常のゆたかさをはかるさまざまな価値尺度のなかで、インフラが直接かわる範疇がすくなくあるはずであり、その意味において、土木デザイン原論の範疇として考察すべきテーマだと思ふ。
- 3) 中井祐：土木デザイン原論のための予備的考察、景観・デザイン研究講演集No.14, pp.104-105, 2018.12,
- 4) 石塚正英・柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典(増補版)』p.47, 論創社, 2013。なおこの意味で「環境」の語を用いた嚆矢とされるコント(1798~1857)の定義は「すべての有機体の生存に必要な外部条件の全体」である。
- 5) 「環境」の語が一般に使われるようになったのは1970年代、いわゆる公害が世界的な問題として認識されたころである。当時は、大気や水質や土壌の汚染が「環境問題」であった。
- 6) ユクスキュル著、日高敏隆・羽田節子訳『生物から見た世界』岩波文庫, 2005.6
- 7) 前掲6), p.29
- 8) 前掲6), p.90
- 9) 前掲6), p.94
- 10) JJ.ギブソン著、古崎敬他訳『生態学的視覚論』p.139, サイエンス社, 1985.4
- 11) 前掲10), p.140
- 12) 本論は哲学的な考察自体を目的とするものではないが、日常とはなにかを議論しようとするならば、本来、フッサールの「生活世界」の概念や、ハイデガーの日常性にかんする議論を参照しないわけにはいかない。われわれが日々現実を生きている実存の世界、その個別性と共同性がどのようにして規定されているのか。それはインフラがかかわる問題でもありうる。今後の課題としたい。
- 13) 木村敏『関係としての自己』pp.47-48, みすず書房, 2005.4